

社会人と大学生の自律的英語学習調査について

加藤 あや美 山田 敦子

On Autonomous English Learning
Between Adult Learners and University Students

Ayami KATO and Atsuko YAMADA

1. はじめに

本稿では、社会人と大学生の英語学習実態を比較し、両者が「何を」「どのように」「どの程度」学習しているかを明確にし、自律的な英語学習について議論する。

加藤・山田(2021)では、社会人英語学習者について調査を行い、4技能のうち伸ばしたいスキルと実際に取り組んでいるスキルは異なる事を明らかにしている。また、加藤・山田(2022)においては、大学生への調査でも、同様に伸ばしたいスキルと取り組んでいるスキルは一致していないという結果を報告している。本稿においては、この2つの結果を比較する事によって、単独の調査では浮かび上がらない、社会人と大学生の自律的な英語学習実態における差異について議論する。

また、社会人英語学習者には上級レベルに属する学習者も多く、様々な学習リソースを用いて自律的な英語学習に取り組んでいる事が加藤・山田(2021)で示されたが、複数の大学に通う英語を専攻としない大学生では自律的な学びに繋がられるレベルに到達している学生が多いとは言えない結果(加藤・山田, 2022)であった⁽¹⁾。本稿では、社会人と大学生の自律的な英語学習実態に焦点を当て、4技能のどのスキルを伸ばしたいと考え、実際にはどのような時間配分で何に取り組んでいるかということについて探り、二者の違いについて検討する。

2. 自律学習とは

自律学習とは、佐藤他(2013)でも示されているように「自分の学習について計画、実行、評価できる学習を指す」というBenson(2001)の自律した学習者の定義が基となり一般的に説明されることが多い。廣森(2013)は自律に関する代表的な研究を「焦点を置く側面」ごとにまとめ整理している。それによると、自律に関する定義は「認知的側面」(Cotterall, 1995; Holec, 1981; Little, 1991, 1999; Littlewood, 1996)、「情意的側面」(Bond, 1996, 1997; Dickinson, 1992; Wenden, 1991)、「メタ認知的側面」(Benson, 1996, 1997; Little, 1991; Winne, 1995)、「社会

的側面」(Cotterall, 1995; Dam, 1995; Van Lier, 1996)の4つの側面で分類されるとしている。このような指摘からも、「自律」に関する研究が様々なアプローチによって研究されていることがわかり、統一的に定義することが困難であることが窺える。

本稿においては、上記にあるように「自律」が持つ広範囲にわたる性質を考慮し、多様な意味を包括的に定義していると考えられる Benson (2001)⁽²⁾の定義を用い「自律」を捉え、「自らの学習において、学習の計画、その学習の実施を自分自身で行うことができる学習および学習者」を自律した学習もしくは学習者として論を進めていくこととする。

3. 先行研究

3.1. 社会人英語学習者の自律的な英語学習

2000年代に入ると、企業での採用や昇進に TOEIC のスコアが考慮されるようになり、2010年代には企業内のコミュニケーション言語を英語とし英語公用語化を推進する日本企業も現れた。学校という教育の場を離れても、英語が必要となり、英語力向上が求められる世の中に変化し始めていった。社会人学習者に対する研究として、糸井(2007)は40代から80代までの生涯学習コースで学ぶ学習者のニーズ分析を試みており、40代から80代までの生涯学習コースで学ぶ学習者を対象として調査をしている。そこでは、学習者が学びたいスキルはスピーキングであり、リーディングにはあまり興味がないという結果が出ており、受講者は様々なニーズがあり、学習の経験が影響したという指摘がなされている。

また、日本において TOEIC を運営する国際ビジネスコミュニケーション協会 (IIBC) は、ビジネスパーソン500名を対象とした英語学習の実態と意欲に関する調査(2019)を実施している。その結果によると、英語学習中と回答した人は全体(500名)の約2割にあたる19.2%であったとしている。さらに、どのように英語の学習をしているかという質問項目に対しては、44.8%が「YouTubeなどの動画を観る」と回答しており、その後は「教材・テキスト本を購入して学習する」(39.6%)、「英語/英会話スクールに通う」(35.4%)、「洋楽・海外ドラマ・海外のTV番組を観る」(32.3%)と続いている。

社会人を対象とした英語学習に関する研究は、学習者ニーズや学習教材等に焦点を当てたものは見受けられるものの、社会人英語学習者が「何を」「どのように」「どの程度」学習しているのかという学習実態を探る研究はあまり行われておらず、社会人英語学習者の学習実態を先行研究から捉えることは容易ではないと言える。

3.2. 大学生の自律的な英語学習

満尾(2012)は国立大学に通う大学生を対象とした英語に特化した自律学習アンケート調査を実施している。それによると、授業の課題や予復習を除いた英語学習時間は週3時間以内が80%以上であったと報告している。これを裏付けるように、国立国語研究所が2016年に行った大学生の学習実態調査結果では、大学の授業以外の学習に費やす平均時間は、1年次2.1時間、

2年次2.6時間、3年次4.0時間、4年次4.8時間であった。またこの調査は全ての学習を対象としており、英語学習はさらに短い事が予想され、時間的にも十分な自律的な学習の時間を確保していないことが示されている。

大学生の自律的な英語学習についての研究は、学習時間の他に、学習コンテンツに焦点を当てたものがある。石橋・三輪(2014)は、英語を専攻する大学生の授業外英語学習の実態調査を行っているが、言語熟達度の高低により授業外英語学習の内容に相違があると指摘している。言語熟達度高群では、他者とインタラクションをとまなうスカイプの使用や英会話教育施設に通う等の取り組みが見られ、言語熟達度低群では、文法や語彙の学習などテキスト中心のリメディアルな英語学習が行われていると述べている。

大学生を対象とした自律的な英語学習に関する研究は多く見られるが、大学生自身が伸ばしたいと考えているスキルと学習内容が合致しているか、また、十分な学習時間が確保されているかということを検証した研究はあまり見られない。そのため、「何を」、「どのように」、「どの程度」学習しているかということを可視化していくことは大学生の自律的な学習の過不足部分を明確にし、補完すべき点を示唆できる可能性が存在する。

4. 調査の概要

4.1. 調査協力者の概要

本研究では自律的な英語学習者を対象としているため、社会人学習者は、自律的な学習グループである英語サークル参加者を対象とし、東海地方の社会人英語サークル27団体から活動を行っている場で協力を依頼した。大学生は、日本の東海地区、関西地区の6つの大学に通学する大学1～4年生にGoogle Formを用いて、筆者らの関係教員を通じて、協力を得た。なお、一般的な大学生の自律的な英語学習への取り組み状況を抽出するため、外国語学部等、英語を主とする外国語や外国文化・文学を専攻する学生はあえて対象としないこととした。

社会人英語学習者は254名、大学生は125名の協力を得た。表1は社会人協力者の性別、年代別の一覧である。表2は、大学生協力者の学年の一覧である。

表1 社会人英語学習者の性別・年代別集計

(単位：人)

	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	不明	合計
男性	5	13	17	25	35	16	2	113
女性	7	24	26	46	29	7	0	139
不明	0	0	1	0	0	0	1	2
合計	12	37	44	71	64	23	3	254

表2 学年別大学生協力者集計

(単位：人)

	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
男性	29	5	1	4	39
女性	26	16	22	22	86
不明	0	0	0	0	0
合計	55	21	23	26	125

4.2. 協力者の英語習得レベル

英語習得レベルによる回答内容の差異をみるために、保有する英語能力試験の級やスコアの記入を依頼した。表3は、調査協力者の英語習得レベル判定に使用した表である。

表3 調査協力者の英語習得レベル

本論文での分類	習得レベル判定に使用した指標		
	英検	TOEIC	自己申告
上級	1級	860点以上	プロ/上級
中上級	準1級	730~855点	中上級
中級	2級	600~725点	中級
初級	準2級以下	595点以下	初級

記入を依頼した各種の英語能力試験の中で、多数からの回答が得られた英検、TOEIC、自己申告の英語力を、英語習得レベルの判定に使用し集計した。レベル判定に当たっては、これら3つのデータのうち、どれか1項目でも当てはまるものがあれば、その最も高いレベルの指標として集計した(例：自己申告レベルは中級であるが、英検準1級保有者は中上級として集計)。

この判定方法による、社会人、大学生の英語習得レベルは下記のような集計となった。大学生の上級に分類できる数が2名であったので、比較調査においては、大学生の上級と中上級を同カテゴリとすることとし、本章以降は中上級と表記する。

表4 英語習得レベル別の集計

(単位：人)

	社会人					大学生				
	初級	中級	中上級	上級	合計	初級	中級	中上級	上級	合計
男性	10	27	34	42	113	22	12	5	0	39
女性	29	31	33	46	139	26	50	8	2	86
不明	0	1	0	1	2	0	0	0	0	0
合計	39	59	67	89	254	48	62	13	2	125

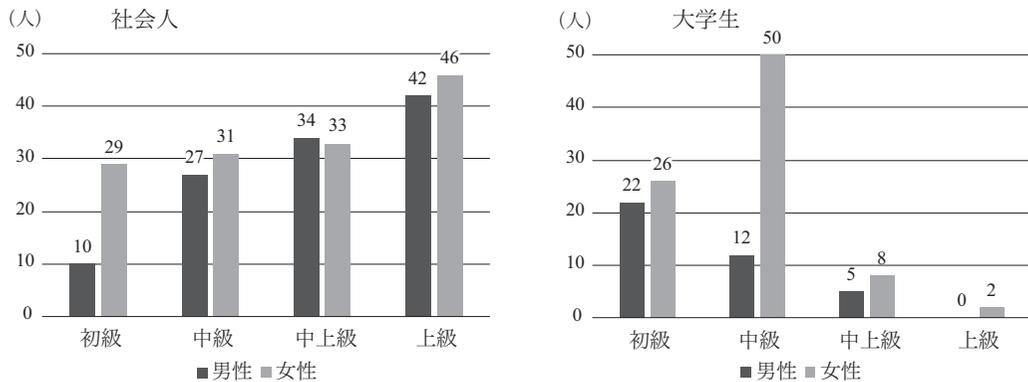


図1 英語習得レベル別の分布

4.3. 調査内容

社会人学習者及び大学生一人ひとりがどのような英語学習を行っているかを探ることが目的であるため、サークルでの学習や大学での英語の授業以外に、各個人が実施している英語学習について尋ね、①どの技能を伸ばしたいと考えているのか、②どのような時間配分で実際に学習をしているのか、また、③どのような教材を使用しているのかという観点で調査を行った。本調査参加者には、研究目的、方法、参加は自由意志であること、また大学生の協力者には成績評価には一切影響しないことおよび匿名であり個人が特定されないことを質問紙及び口頭、または Google Form の冒頭部分にて説明を行い、同意を得た上で実施した。

5. 調査結果

5.1. 最も伸ばしたいスキル

社会人および大学生の英語学習者が、Speaking, Listening, Reading, Writing の英語4技能について、伸ばしたいスキル順に1から4に順位付けをした回答を得た。図2は、社会人と大学生の英語学習者がそれぞれ最も伸ばしたい（1と回答したもの）と考えているスキルについての内訳である。社会人、大学生ともに、習得レベルに関係なく Speaking を伸ばしたいと考えており、次いで、Listening という結果であった。また、上級になるほど4技能をバランスよく向上させたいと考えていることが顕著に表れた。

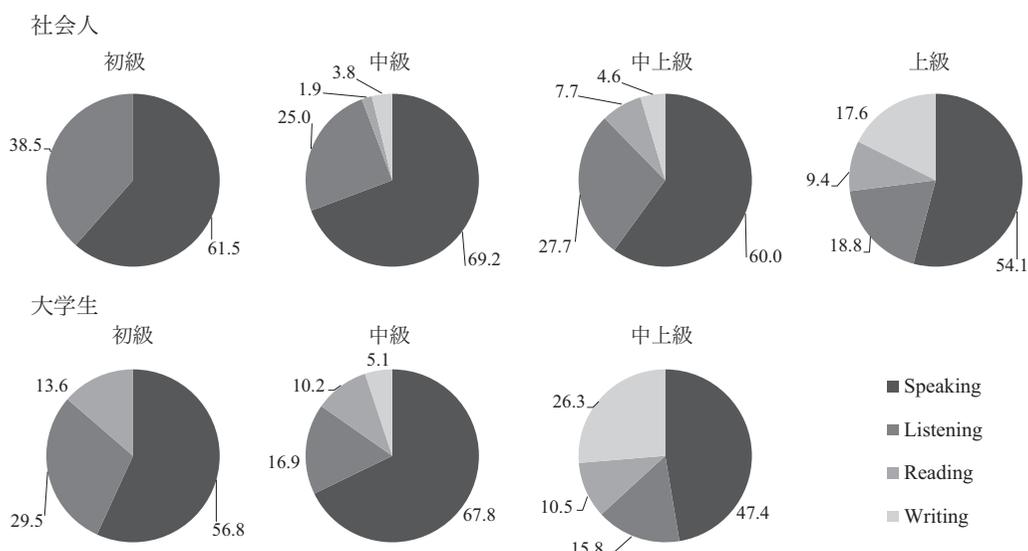


図2 伸ばしたいスキル

5.2. 技能の学習割合

次に、4技能をそれぞれどのくらいの割合で学習に取り組んでいるか、英語の自立的な学習時間を100とした場合、どのような時間配分で学習に取り組んでいるかということについて尋ねた。図3は、社会人と大学生の自立的な英語学習時間の割合を表したものである。社会人はListening、大学生はReadingに最も時間を割いていることがわかった。社会人、大学生ともにレベル別に見ると、習得レベルが上がるにつれて4技能の学習時間割合のバランスがとれてく

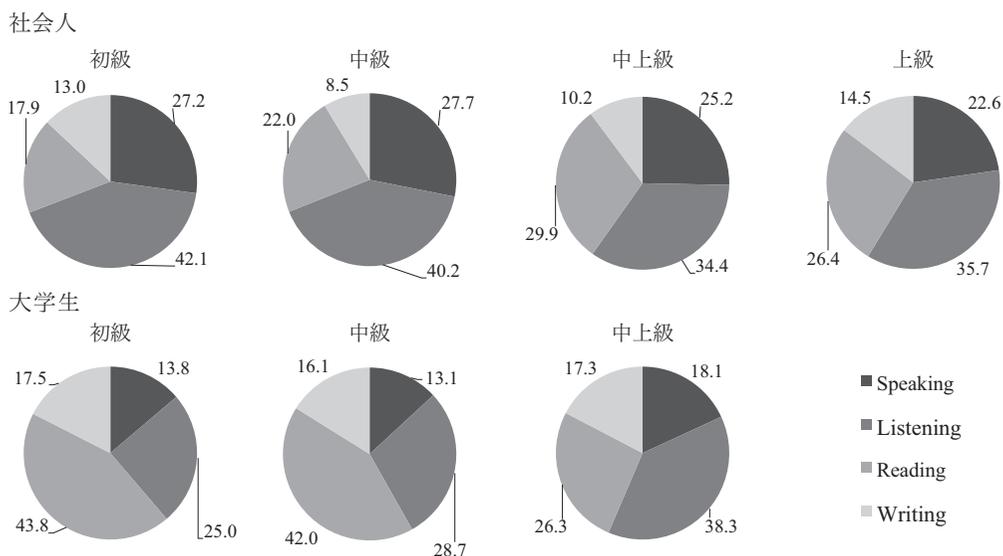


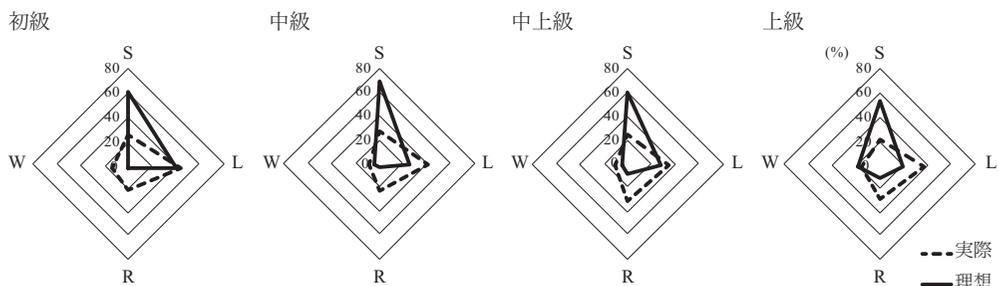
図3 実際の学習内容

ることが表れている。

5.3. 「理想（伸ばしたいスキル）」と「実際（学習割合）」の比較

続いて、学習者自身が伸ばしたいと考えているスキル（理想）と実際に学習に取り組んでいるスキルの割合（実際）についての比較を試みる。

社会人



大学生

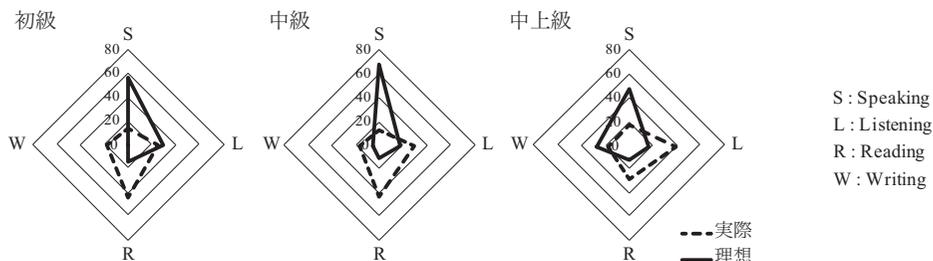


図4 伸ばしたいスキルと実際の学習内容

図4は、理想と実際を重ね合わせて伸ばしたいと考えているスキル「理想」と自立的に取り組んでいる学習時間数「実際」を示したものである。これを見ると、社会人、大学生どのレベルにおいても Speaking の「理想」部分の割合が高くなっていることがわかる。しかしながら、どのグラフにおいても「実際」部分は、Speaking の割合が高いわけではなく、別のスキルの割合が高いことが確認できる。社会人、大学生それぞれのレベルにおいて形にばらつきはあるものの、伸ばしたいと考えているスキルの「理想」と4技能の学習割合の「実際」は必ずしも重ならないという結果となった。

5.4. 学習リソースについて

どのような学習リソースを活用しているのかを「よく行う」を7とし、7段階で回答を得た。社会人、大学生ともに同じ内容について尋ねたが、「予習・復習」については、社会人は英語サークルを、大学生は授業を想定しての文言に代えた。その結果を、社会人、大学生のそれぞれの平均の数字を、習得レベルが高い層の回答順に作成したものが表5、表6である。

表5 社会人の学習リソース

	ドラマ、ニュース	本、雑誌	外国メディアウェブサイト	eメール	予習・復習	音読	語学番組	参考書	ネット教材	ライティング	オンライン英会話
平均	4.17	3.99	3.46	3.48	3.88	3.55	3.60	3.05	3.22	2.09	2.06
上級	5.16	5.07	4.52	4.29	4.01	3.70	3.15	3.00	2.83	2.43	2.16
中上級	4.46	4.46	3.66	3.49	3.94	3.45	3.68	3.15	3.51	2.15	1.89
中級	3.48	3.15	2.83	3.00	3.87	3.87	4.19	3.12	3.52	1.96	2.40
初級	2.38	1.92	1.64	2.33	3.54	3.00	3.69	2.90	3.23	1.41	1.64

表6 大学生の学習リソース

	音読	参考書	ドラマ、ニュース	ネット教材	外国メディアウェブサイト	本、雑誌	予習・復習	ライティング	eメール	語学番組	オンライン英会話
平均	3.45	4.45	2.92	3.84	2.37	3.05	4.70	1.98	2.22	2.21	2.11
中上級	5.43	5.07	4.64	4.64	4.43	4.00	3.86	3.36	3.21	3.21	3.00
中級	3.28	4.58	3.02	4.00	2.40	3.04	4.58	1.98	2.35	2.39	2.33
初級	3.07	3.98	2.29	3.24	1.85	2.80	5.00	1.54	1.93	1.71	1.49

この結果を見ると、社会人の特徴としては、習得レベルの高い学習者は、英語圏で日常的に使用されているもの、学習者向けに使用されていないリソースを活用していることが現れている（図5）。大学生は、習得レベルによって使用する学習リソースの差は顕著ではなかったが、中上級者ほど多くの学習リソースを使用している事がわかる。また社会人・大学生とも、「予習・復習」はレベルに関係なく実施されている結果となった。

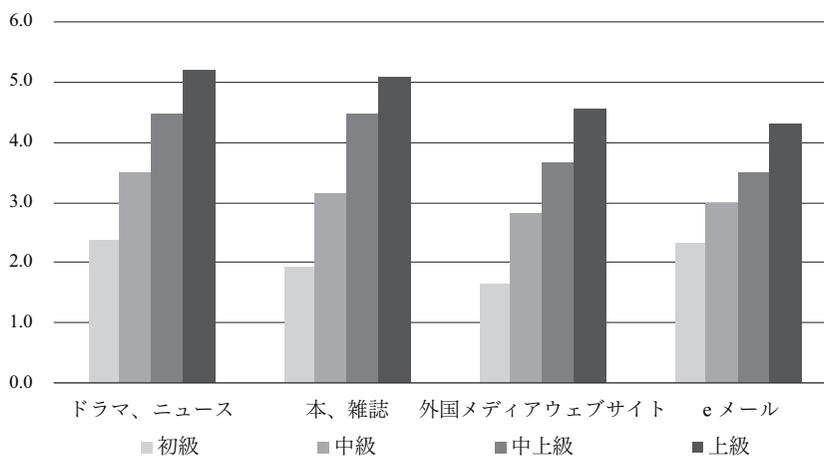


図5 社会人上級者がよく使用する学習リソース

5.5. 学習リソースに対する自由記述について

学習リソースについては、質問紙調査の協力者のうち社会人が34名、大学生が19名に、具体的な学習内容についての自由記述を依頼しeメールで回答を得た。学習リソースとして利用しているコンテンツとコメント内容をまとめたものが表7である。

表7 学習リソースに対する自由回答

		初級者	中上級者
社会人	コンテンツ	CD、NHK ラジオ講座	BBC、CNN、英字新聞、海外ドラマ
	コメント内容	<ul style="list-style-type: none"> ・英語のCDを家事しながら聞く。ゆっくり勉強する時間が取れないから。 ・NHK ラジオ英語講座、無料で聞ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然な英語をアウトプットできるようにするために、自然な英語をインプット（読む・聞く）している。 ・海外ドラマを英語に集中しながら、字幕でどのような訳がされているかをチェックする。通訳・翻訳の際に多少役にたつかなと思う。
大学生	コンテンツ	単語帳、TOEIC 問題集	TOEIC 問題集、英語記事や海外ドラマ
	コメント内容	<ul style="list-style-type: none"> ・TOEIC の対策本をする、単語帳を使って勉強する英語の記事を読んだり、聞いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・長期的動機付けでは自分のモチベーションは保たないため、短期的動機付けを活用している。学習方法は、英単語帳を用いて、発音に気をつけながら赤シートで勉強している。

6. 考察

6.1. 伸ばしたいスキル

社会人、大学生とも **Speaking** を伸ばしたいという回答が圧倒的に多数であり、糸井（2007）と同様の結果を得られた。特に社会人は学校教育で文法や英文読解中心の教育を受けており、十分学習できなかったスキルを伸ばしたいという意欲が強いのではないかと推察される。

また大学生も同様の結果が現れた。昨今は新学習指導要領実施により、様々な部分での学校英語教育改革がなされている。小学校においては、教科としての英語がスタートし、授業内容が「聞く」「話す（やり取り）」「話す（発表）」「読む」「書く」の4技能5領域化され、英語を使用して自らの意見を表現するということが重視されることとなり、インプットした知識をアウトプットできるようにするための学習内容へとシフトしている。このような背景からも、大学生もまだアウトプットである **Speaking** が十分でないと感じ、そのスキルを向上させたい可能性があると考えられる。

6.2. 学習時間の割り当て

4技能の学習バランスについては、社会人が **Listening**、大学生が **Reading** との回答結果が分かれた。仕事の合間に学習をする社会人にとって **Listening** は、隙間時間を活用できる学習方法であり、たとえ、よく内容が理解できていなくても、決まった時間内に終えられる、一人で学習しやすい教材と捉えられていると考えられる。これに対し、大学生にとって **Reading** は、高校までの学習スタイルで慣れ親しんだ学習方法であると思われる。また初級者・中級者にとって **Reading** は、知識や理解不足により、辞書で意味を調べたりするなどに時間を要する事

が想定され、これにより、時間的余裕のない社会人ではあまり実施されていない。反対に大学生の初級者や中級者にとっての Reading は、時間を要することからも全体の比率からみると最も取り組まれているスキルであるということが結果の違いとして表れたと考えられる。

6.3. 「理想（伸ばしたいスキル）」と「実際（学習割合）」の比較

社会人、大学生とも、伸ばしたいと考えているスキルの「理想」と4技能の学習割合の「実際」は必ずしも重ならないという結果となった。習得レベルの高い層では、伸ばしたいスキルとして Speaking のみならず、一定の回答者が他のスキルをあげており、他の習得レベルの回答者とは異なる傾向がみられた。また習得レベルの高い層は、実際の学習も4技能をバランス良く学習しており、伸ばしたいスキルとしても、実際の学習においても、4技能の重要性を認識している事が窺える。

6.4. 学習リソース

選択肢での回答、自由記述のどちらも、習得レベルの低い層では Listening 用 CD や、問題集など、語学学習のテキスト的なリソースであり、高い層では英語圏で日常的に使用されているニュースやドラマなど、学習者向けに作成されていない生のコンテンツが使用されている結果となった。この傾向は社会人、大学生に共通するものであった。また、コメント内容も大きな違いがあり、習得レベルの高い層では、自分に必要なスキルを理解しており、それを得るためのリソースを選び、実践していることが明らかとなった。特に社会人の上級者の回答の中には、Benson (2001) に定義される「自律」した学習者と矛盾のないと考えられる内容のものも得られた。

7. まとめ

本稿では、社会人と大学生の自律的な英語学習実態に焦点を当て、4技能のどのスキルを伸ばしたいと考え、実際にはどのような時間配分で何に取り組んでいるかということについて探り、二者の違いについて検討した。

社会人、大学生ともに、学習者の英語習得レベルが高くなるにつれて、自律的な学習において4技能をバランス良く学習しているという結果が得られた。また、「理想（伸ばしたいスキル）」と「実際（学習割合）」の差も小さく、特に、社会人の上級レベルに属する学習者は、偏りが少なくバランスの取れた学習をしていた。また、効果的な学習リソースの活用といった観点においても、この学習者の層においては同様の結果がみられた。

今回の調査では一定数の社会人の英語上級者の回答を得ることで、英語習得レベルの高い学習者は、自律的な英語学習ができていた事が確認できた。また、大学生の中上級者の回答との比較により、英語習得度が高ければ、自律的な英語学習を実践できる学習者に近いという事が推察された。

大学では自律的な学習の方法を学ぶような機会が少なく、現状においては習得レベルの高い層のみが、自律的な学習に取り組める状態にあると考えられる。この状態を打破するために、大学英語教育においては、自律的な学びのレベルに到達できる素地を養いつつ、英語それ自体の教授だけにとどまらず英語学習への取り組みの具体的方法を身につけることができるよう導いていく必要があるのではないかと考える。

今回の調査で協力を得た大学生は英語を専攻する学生ではなく、1・2年生の協力者が多数であったことから、英語習得レベル初級に位置付けられる学生の割合が多かった。このレベルの大学生は、英語の基礎的な知識が十分に定着していない可能性があり、4技能のどのスキルにおいても自律的に学習に取り組む方法自体がわからない可能性が高いと思われる。そのため、授業以外の英語学習に何をどのように取り組むべきかということについて伝える必要があるのではないかと考える。大学生のうちに自律的な英語学習者の素地を養うための具体的な方法の検討については、今後の課題としたい。

注

- (1) 表2、表4に記したサンプルと同一のものである。
- (2) Benson (2001)においては、学習の計画や実施、その学習の評価までを「自律」として定義しているが本稿においては学習の計画および実施の部分までの調査に留めたことから学習者が自らの学習を評価する部分においては含めないこととした。

謝辞

本調査を実施するにあたり、調査にご協力いただきました社会人、大学生の英語学習者のみなさまに厚く御礼申し上げます。

参考文献

- Benson, P. (2001) *Teaching and researching autonomy in language learning*. Longman
- 廣森友人 (2013) 「自律学習の処方箋—自律した学習者を育てる視点—」『中部地区英語教育学会紀要』42, 289-296
- 一般社団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2019) 「英語学習の実態と意欲」<https://www.iibc-global.org/iibc/press/2019/p123.html>
- 石橋嘉一・三輪眞木子 (2014) 「英語専攻の日本人大学生における授業外英語学習の実態調査—英語学習内容のカテゴリ分析と言語熟達度との関係—」『日本教育工学会論文誌』38-1, 39-48
- 糸井江美 (2007) 「生涯学習として英語を学ぶ人たちのニーズ分析」『文教大学文学部紀要』21-1, 171-189
- 加藤あや美・山田敦子 (2021) 「社会人英語学習者の学習実態—伸ばしたいスキルと学習内容の差異について—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』24, 51-64
- 加藤あや美・山田敦子 (2022) 「大学生の英語学習実態—伸ばしたいスキルと学習内容の差異について—」『桜花学園大学保育学部研究紀要』25, 67-79
- 国立教育政策研究所 (2016) 「平成28年度大学生等の学習状況に関する調査研究—結果の概要（大

- 学昼間部) 一」 https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_digest_h29/gaiyou.pdf
- 佐藤恭子・権瞳・Alan Bessette 他 (2013) 「自律学習におけるメタ認知ストラテジーの指導に向けて—「学習記録」と「授業アンケート」の実践—」『追手門学院大学教育研究所紀要』31, 40-48
- 満尾貞行 (2012) 「国大生の英語自律学習アンケート調査 (1回目) 報告—国大生の促進を目指して—」『横浜国立大学大学教育総合センター紀要』2, 35-50

(受理日 2023年1月5日)